

Title	免償價值について
Author(s)	高田, 保馬
Citation	經濟論叢 (1929), 28(6): 894-899
Issue Date	1929-06-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/129754">http://dx.doi.org/10.14989/129754</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

京都帝國大學經濟學會

# 經濟叢論

第二十八卷 第六號

昭和四年六月一日發行

## 論叢

戶數割の性質

法學博士 神戸正雄

勞銀の理論

文學博士 高田保馬

マルサスの恐慌論

經濟學士 谷口吉彦

## 說苑

近江商人の活躍について

經濟學士 菅野和太郎

兩圓との關係に就て

經濟學士 堀江保藏

## 雜錄

免償價值について

文學博士 高田保馬

生産立地理論について

經濟學士 菊田太郎

中央と地方の豫算形式

經濟學士 中川與之助

國民經濟と大都市經濟

經濟學士 大谷政敬

大阪市の人口動態

經濟學士 武田長太郎

佛蘭西國營輸出信用保險

經濟學士 近藤文二

## 法令

救護法・農業調査令

## 附錄

本誌第二十八卷總目錄

## 雜 錄

### 免償價值について

高 田 保 馬

大山千代雄學士は國家學會雜誌第四十卷第一號所載の其論文『高田博士の免償價值説を評す』に於て、私が經濟論叢大正十五年七月號によせたる論文の批評を公にせられた。當時、駁論を草せむと思ひつゝも眼前の仕事の多忙に紛れて、今日まで之を怠つてゐたが最近同一の問題について別に起稿する必要に迫られ、少しく考をまとめたる序を以て、それを書きたいと思ふ。私の考方は大山氏により次の如く要約せられてゐる。

『經濟財たるの第一の要件は効用を有することである。効用とはある物能が吾人の欲望を満足せしめ得る性質である。効用を有することによつて財となるのであるが、しか

し之のみにては未だ經濟財とはならない。博士によれば經濟財たるの第二の、しかも決定的な要件は獲得の困難である。効用なくば獲得の欲求生ぜず、此欲求あるも獲得の困難なくば代償を拂ふを要せず、効用ありて且つ獲得の困難なる時に代償を拂ひて財を獲得する。この時その財は經濟財となるのである。博士によれば經濟財に特有なる價值すなはち經濟價值はある財の所有が代償を免れさせる故の有難きである。財の所有には所有價值又は使用價值と、財の獲得に要する犠牲を免れしむるありがたさ、すなはち免償價值とを伴ふが、後者が經濟價值である。』

大山氏のこれに對する批評をば順次に吟味しよう。

大山氏はまづ曰く獲得の困難を以て經濟價值の決定的要件とするのは一體費用説の立場である。『いま費用説の復讐を試みんとするならば、少なくとも利用論者（限界效用論者のこと——高田附記）の非難に一々答へた後になされなければならぬと思ふが、博士は何故かその勞を吝まれて居る。』これについてはかう答へたい。一定の主張をするのに、積極的に自己の信ずる所を論證して止むにしても、進みて反對の立場から非難の批判をもするにしても、それは主張するものゝ自由

1) 國家學會雜誌 第四十卷 第一號 一一一頁。

2) 同 一一七頁。

である、私が問題となれる論文に於て、『一々利用論者の非難に一々答』ふべき義務を有すとは思はない。更にまた、その非難に對する答辯乃至論駁は別の機會に於て幾たびか、之を試みてゐる、何も私が其勞を惜んでゐる譯でもない。

## 二

大山氏の第一の論難はかうである。『獲得の困難は價值の第二次的の決定要件ではない。』『獲得の困難あるによりて經濟財たるにあらず、欲望と充當との關係に於て不足なるによつて經濟財たり、經濟財たるが故に獲得の困難を冒し又は代償を提供しようとするのである、決してその反對ではない。』『經濟財の唯一の要件は限界利用をもつといふことである。』

これに對しては次の如くに答へる。一體これは何の論難でもない、かゝることを一かどの論難らしく書きならべてあることが思案の不足を示してゐる。不足なるものとは何であるか。如何に效用の大なるものであ

るにしても（此效用は全部效用をさす）、獲得の困難がないものならば、即ちどれだけにも困難なく所有し得らるゝものであるならば、不足はない、限界效用はない。獲得の困難であると云ふことが、即ち不足そのものである、限界效用を伴ふと云ふこと、そのことである。欲求せられざるものについては獲得の必要生ぜず、欲求せられて而も獲得の困難なるもの、これが不足なるものであり、限界效用を伴ふものである。かるが故に、『獲得の困難あるによりて經濟財たるにあらず。』『不足なるによつて經濟財たり』と云ふ大山氏の主張は『不足なるによつて經濟財たるにあらず、不足なるによつて經濟財たり』と云ふことを述べたるもの、これが何の論難であり得るか。

『良い飲料水をパイプで私の家までひくには、引水の工事には勿論、之を維持するにも分働並びに費用がかゝるであらう。しかし之によつて水が豊富に得らるゝならば、費用がかゝるにも拘はらず私は水に價值ありとは考へないであらう。』『若し獲得の困難を以て經

濟財たるの決定要件となすならば『豊富に得らるゝ場合』も水は經濟財であるが、實はさうではない。『不足なりや、否や従つて限界利用をもつや否やを以て經濟財たりや否やの決定的要件』とすべきである。かう云ふ大山氏の主張も事態の真相を洞察せざることから来る。欲求を充たし得る以上の水については獲得の意志がない、従ひて獲得の困難はないはずであ。従ひて獲得の困難はたゞ欲求せらるゝ限りの水についてのみ存する。此際、水が經濟財であるかないかの區別は獲得の困難を標準とするも、不足を標準とするも、同一のことである。

大山氏の論難の主要なるものは今述べたる點であると思ふが、それは餘りに無意義ではなからうか。

大山氏の論難の第二の點は免償價值即ち犠牲を免れしむる故の有難さが經濟價值であると云ふ私の見解について次の事を主張するにある。『免償價值が價值を

構成する場合の存することを認める。』例へば A が B の代償によりて得らるゝならば、A の價值は B のそれだ

けのものである。併しながら此場合、A の限界効用が『代替、交換によつて全く違つた種類の財貨(B)の利用に於て發見せられる』のである。即ち、此場合、免償價值が價值を構成するやうに見えて、其實は限界効用が之を定めるのである。『この場合には免れるところの犠牲から價值を説明するとしても、全く正確に限界利用の法則に従ふもの』である。然り、此場合の免償價值が一面限界効用として認め得らるゝ一面の存することは、私も之を知る、別に大山氏の教示をまつまでもない、併しながら話はそれだけの事である。限界効用の法則に従ふとしても、『免れるところの犠牲から價值を説明する』ことさへ認められるならば、私の立場はそれ以上を要求しない。かくて此點の大山氏の論難は其實何の論難でもない。大山氏が限界効用説に關するその知識を示されたるまでである。

### 三

大山氏は次に、免償價值と價值との關係について、

大體下のやうのことを述べられてゐる。『免償價值が價格を決定すると云ふことは首肯し難い。反對に價格が免償價值を決定すと云ひ得ざるか。』所有者又は買手にとりての免償價值はその價格により決定せられる。『又賣手の免償價值は費用によりて決定せられず、市場價格によつて定まるにあらざるか。賣手にとりての犠牲は財貨そのものゝ交換價值であつて費用ではない。』すなはち免償價值は交換價值を豫想して始めて成立する、逆に免償價值を以て交換價值を決定するは事實に違ひと云はなければならぬ。<sup>5)</sup>

此批評は要するに次の如き論點に歸着すると思ふ。免償價值は價格によりて決定せられる、而して、價格は價值從ひて限界效用によりて決定せられる。かるが故に、價格が免償價值によりて決定するとは見られない。さて此立場に對する詳細の論駁を加ふことは、此短き答辯に於て試み得ない、それは詳細の論述を必要とするが故である。併しながら、それは必要でもない、私は別の機會に於てたびたび之を公にしたからで

ある。<sup>6)</sup>茲にはたゞ、以上の批評に對する直接の答辯をのみ述べよう。價格が免償價值を決定すと云ふ命題は許されたい。自ら生産する人にとりては、財の免償價值は生産の費用によりて定まる。大山氏は『賣手にとりての犠牲は財貨そのものゝ交換價值であつて費用ではない』と述べられてゐるが、少くも財の賣行が十分なる限り、再生産の費用だけが財の所有によつて免れてゐる代償であること、何人も之を疑ひ得まい。『免償價值は交換價值を豫想して始めて成立する』と云ふは、根據なき、而して無謀の斷定である。買手の免償價值はなるほど見込の價格によりて定まる、併しながら、交換前に於ける見込の價格は交換と共に決定せらるゝ事實の價格ではない、又見込の價格が定まらずとも、免償價值は定まりうる道がある。財の價格がその財の免償價值を決定すると云ふは、理由なき主張である。かくて、免償價值をすべて、價格の被決定者であると見る大山氏の主張は何れの點から見ても誤つてゐる。

5) 同 一二四乃至一二五頁。

6) 特に、『生産係數について』價格と獨占、二四七頁以下。

なほ私が價格が結局生産費である勞銀によりて決定せらるゝことを説き、此勞銀は究局に於て、經濟外的に決定せられると云ふことを述べた。それに對して大山氏は勞銀決定の事情を次の如く述べられる。『他の諸財貨の價值及び價格と同じやうに、勞働の價值はその限界利用に從つて評價せられ、その價格すなはち勞銀はその限界賣買者の評價によりて決定せられる。買手にとりての勞働の限界利用はその限界生産力であり、賣手にとりての限界利用はその生活標準であることは云ふまでもなからう。』併しながら、勞働の賣手（勞働者）にとりての限界效用がその生活標準であるとは不可解の主張である。加之、大山氏は限界效用説の立場に立ちながら限界效用説の必然的な結論を忘れたるものである。限界效用説から云へば、勞働に歸屬せしめらるゝ效用こそは、勞銀の唯一の決定者であるべきではないか。この效用と勞働の供給數量とさへ與へられるならば、勞銀はそれによりて決定せられる。生活標準は勞働供給數量を決定しよう、しかし直接に

勞銀を決定することなきはずである。此一點は大山氏の限界效用説に對する理解の如何に不徹底なるかを示して餘りがあると思ふ。

#### 四

大山氏は進みて『博士が限界效用説に對し抱かるゝ二三の誤解を訂しておかうと稱しながら私に教へられてゐる。』この誤解の訂正と云はるゝものゝ内容は次の如くである。

- (1) 『財貨の利用は直ちに價値の標準となることはない、限界利用なるときに限りて價値の標準となるのである。』
- (2) 『限界利用説は利用によつて直ちに價格を説明せんとするものではない。』『私共は限界利用に從つて評價し、その評價に從つて經濟活動を営む。その經濟活動の社會に現はれたる一の結果が價格である。』<sup>8)</sup>

これが私の誤解に對する訂正であるさうであるが、私不敏なりといへども、限界效用説を學びて以來二十五年かゝる文句によりて訂正せらるべき誤解をかつて抱

7) 同 一二四、一二五頁。  
8) 同 一二九頁。

いたことはない。私が利用と限界利用との別を知らざるかのやうに述べられてゐるが、大山氏は何を夢みてさう云ふ推斷をせらるゝや。

限界效用説は決して理解し易き學説ではない。私の如きも多年之を十分に理解したいと思つて可なり苦心を拂つてゐるが、非才未だこれについて自信を得るだけに至らぬ。然れども、現代の價格理論中、最も有力なる學説であることだけは疑ひ得ない。マルクス經濟學説が支配的勢力をふるへる現代日本にありて、大山氏が超然として限界效用説を支持せらるゝことは敬意を拂ふに値する。たゞ大山氏の主張についてはなほあまたの疑問がある。一體、限界效用説のうち議論の最も複雑なところは生産財の價值、即ち歸屬の理論にある。且つ又、限界效用説の十分なる理解は數學派經濟學(ワラス、パレトをはじめとして)の考察によらずして得らるゝものではない(此點をかつてアモン教授とも話し會つた)。然るに大山氏は歸屬理論については(少くも從來發表せられたる諸論文の關する限り)、

格別の注意を拂はれざるが如くである、否、その考察に立入つてゐられるとは信じ得ない。併しながら、限界效用説の最大の難點は此歸屬理論にあるが、これをぬきにしての限界效用説ならば、大部分の財が刻々新に生産せられつゝある以上、殆ど價格の説明としての價值はないはずである。なほ、數學派經濟學に關しては、大山氏がジェヴォンスの利用の最終度と、ヴィイザアの限界效用とを、混同せらるゝところから見れば、理解を缺いでゐられるやうである。大山氏は限界效用説の專賣元であるが如き態度をとらるゝ前に、更に一段の善心を重ねらるゝ必要はないか。少くも現在のところ、その主張の粗漏があまりに多く目につくやうである。議論のおもむく所にまかせて、言辭禮を失する所なきやを恐る。 切に寛恕を乞ふ(一九二九、四、七、夕五時)。